

映画「ノッティングヒルの恋人」にみるイギリスのテラスハウス

English terraced-houses in the film 'Notting Hill'

辻本敬子

Takako Tsujimoto

1. はじめに

筆者が大学で講義を行っている「住居論」では、日本と外国の住居の違いを知るために、学生たちと邦画や洋画を何本か鑑賞している。その中で、イギリスのテラスハウスの教材としてよく使うのがリチャード・カーティス脚本の映画「ノッティングヒルの恋人」(原題: Notting Hill, 1999年)である。本稿では、この映画に登場する三軒のテラスハウスを通じ、イギリス人の住生活の一端をみると同時に、この映画のストーリー展開を支えるテラスハウスの魅力を検証する。

2. リチャード・カーティスの映画

この映画には原作はない。脚本家のリチャード・カーティスは、DVDに収録されたインタビューの中で、「いつも週末にやっている仲間うちのパーティーに、誰もが知っている超有名人、たとえば Madonna とかダイアナ妃を連れていったら、みんなどんな反応をするだろうか?」という一つのアイデアから出発して、物語をふくらませていったと述べている。最終的に、「ノッティングヒルの恋人」は、イギリスの下町で旅行専門書店を営む離婚歴のある主人公の中年男性ウィリアム・タッカー(ヒュー・グラント)と、今をときめくハリウッド女優アナ・スコット(ジュリア・ロバーツ)とのラブ・コメディという形になった。

カーティスは1994年に、イギリス映画としては例外的にアメリカでの興業的成功をおさめた「フォー・ウェディング」(原題: Four Weddings and a Funeral)の脚本を書いている。これは、カーティス自身が、他人の結婚式やお葬式で未来の彼の妻と偶然に鉢合わせした体験をもとにしている。その後、1999年の「ノッティングヒルの恋人」、2001年の「ブリジット・ジョーンズの日記」(原題: Bridget Jones's Diary)、2003年の「ラブ・アクチュアリー」(原題: Love Actually、監督も務める)など、イギリスを舞台とした作品を送り出している。これらの作品に共通する特徴は、イギリスの一般人の日常生活をユーモアをこめて描いていることである。深刻な社会問題や劇的な展開や特別なスリルはない。テーマはいつも家族や恋人たちの愛や友情であり、ハッピーエンドで終わる。また、カーティスはオックスフォード在学中から、ローワン・アトキンソンらと演劇の台本を書き始め、その後テレビのシリーズ「ミスター・ビーン」(1990-1995)の脚本を担当していたため、独特のイギリス流の笑いを盛り込むのに巧みである。

3. イギリスのテラスハウス

物語は、ロンドン市内の西部ノッティングヒルにあるウィリアムの書店、ウィリアムの家、ウィリアムの友人のマックスとベラの家、という3つのテラスハウスをぐるぐるとめぐるって進行していく。ウィリアムの書店はポートベロー通り(Portobello Road)にある。ウィリアムの家はポートベロー通りと交わるウェストボーン・パーク・ロード(Westbourne Park Road)にある。また、ウィリアムの友達のマックスとベラの家はランズダウン・ロード(Lansdowne Road)の高級住宅街にあるという設定である。

そもそもテラスハウスとは何か。英語ではterraced house、terrace houseあるいはrow houseと呼ばれ、3戸以上連続した住宅、すなわち長屋の一種であり、道路に面して建ち、裏が庭になる。アメリカでは同様のものを一般に「タウンハウス(town house)」というが、イギリスで「タウンハウス」というと、田舎にある本邸「カントリーハウス(country house)」と対立する概念になることもある。また、逆にアメリカで「テラスハウス」というと、各層ごとにセツバックした多層の住宅のことを指すことが多い。

イギリスでは、他の国ほど高層住宅は多くない。郊外では20世紀になって急増したセミデタッチトハウス(semi-detached house: 二軒長屋)が、都市部では伝統的なテラスハウスが主流となっている。ところで、日本のアパートやマンションは「ハウス(house)」の範疇には入らない。一つのフロアの平面上にあり、入口が各階にあるこれらの住宅は「フラット(flat)」と呼ばれる形式である。

これに対して「ハウス」は、一戸建てにしる、セミデタッチトハウスにしる、テラスハウスにしる、道路に直接開く入口と、地面に接した専用の庭をもつ。しかし、このような住宅はどうしても土地を多くとりがちであるので、テラスハウスは、道路に面する部分の幅をできるだけ狭くし、奥行きを深くする。すなわち、「普通の一戸建住宅を左右からぎゅっつつぶして幅を小さくし、その分、縦方向と奥行きを大きくしたものを、互いにぴったりくっつけて並べた住宅」とでもいえるだろうか。まるで、アリが巣を作る様子を観察するために、間隔の小さな二枚のガラス板の間に土を入れて造った、アリの住まいの観察装置のようである。イギリス人は、地下階や3-5階の地上階からなる多層の「ハウス」の中で、装置の中の蟻のように、毎日せわしなく階段を上ったり下りたりしてくらしている。

テラスハウスの歴史は長く、イギリスにおいては17世紀にロンドンやバースで発祥した。産業革命によって都市人口が増加するにつれて、間口の狭い住戸をぎっしり並べたテラスハウスが、土地

を効率よく使うために、多くの投機的土地開発業者によって、まとまった単位で大量に建設されるようになる。テラスハウスには、建築装飾にすぐれて階高のある高級なものから、単調なファサードで最低限の広さの労働者階級のものまである。また、住み手や用途が変わってもその度に建て替えられることはあまりなく、何十年、時には数世紀を経たテラスハウスが改装を繰り返しつつ使い続けられることもある。

都市のテラスハウスは汎用性があり、ポートベロー通りなどの商業地区では、店舗、食堂、事務所、ホテル、下宿屋などとして用いられることもある。ウィリアムの経営する書店はテラスハウスの一階にあり、前後に並ぶ二つの部屋に分けて書棚が配置されている(図1,2)。このように住居と社会活動が混然一体となった地域は昼も夜も活気にあふれ、職住近接の都市空間を形成する。監督のロジャー・ミッチェルはインタビューで、物語に現実味を与えるために、ノッティングヒルという、人種が雑多に共存する場所を主人公の二人が出会う舞台として選んだという。

4. ウィリアムの家

ストーリーの展開上、有名女優が素顔の状態ですら主人公ウィリアムと交流し、次第に関係を深めていくためには、2人だけでくつろげる閉じた空間が必要である。ここでは、ウィリアムの家はその役



図1 ウィリアムの旅行書専門店



図2 ウィリアムの店内部

割を果たしている。ここはカーティスがかつて住んでいた家である(図3,4)。映画では、通りに面した表側一階はつぶれた店舗になっており、入口を入った前室部分と奥の台所部分は、以前は裏庭への通り抜け通路だったようで二階がなく、右隣りの家のむき出しの隔壁に、台所設備が造りつけてある(図5)。入ってすぐの部屋は台所と食堂で洗濯機もある。半階上がってリビングがあり、本棚、書き物机、ソファ、テーブル、テレビ、電話があり、さらに半階上がってバスルーム、さらに半階上がって2つの寝室に至り、また、屋上にも上がれるようになっている。

映画ではこれらの空間が映され、登場人物はこれらを結ぶ階段を何回も上り下りする。階段を上り下りするの、ウィリアムと同居人の男性スパイク、それに偶然ここに来た女優のアナ・スコットである。たとえば、スパイクはTシャツを着替えるために食堂と自室を往復し、タブロイド紙を読みながら階段を上り、ウィリアムの潜水服を着て階段を下りる。アナはトイレに行くために階段を上り、ウィリアムの寝室を借りるために階段を上る。ウィリアムは、出かける前に

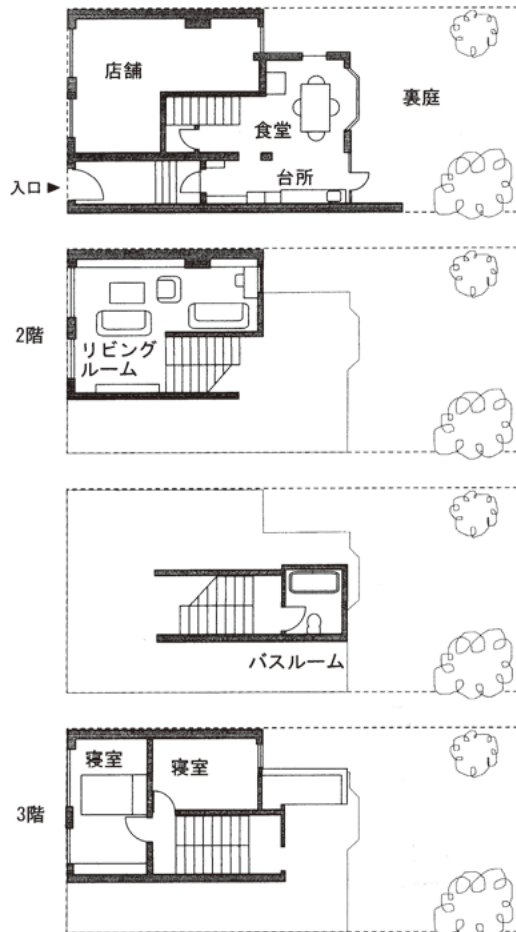


図3 ウィリアムの家、平面図

メガネを探して駆け下り、時間が足りなくなって上着を着ながら駆け下り・という具合である。登場人物が階段をある時はゆっくり、ある時は駆けるように上り下りする様が、映画に心地よいテンポをもたらしている(図6-11)。

また、アナがウィリアムの家で初めて夜をすごした時、最初アナはウィリアムの寝室で、ウィリアムは階下のリビングのソファで休む。2人の部屋の間には存在する階段は、まだ超えられない隔たりを暗示している。しかし、ウィリアムがソファで眠れずに悶々としていると、その階段を下りてくるアナの足音が聞こえてくる。ここでも、テラスハウスの特徴である階段が効果的に利用されている。



図4 ウィリアムの家(中央の白っぽい部分とその右の狭い部分)

5. マックスとベラの家

これに対して、ウィリアムの友人のマックスとベラのテラスハウスでは、アナが、ウィリアムの心優しく楽しい友人たちと知りあい、また、イギリスの住まいがなかなか快適であることを実感する場所である。

ウィリアムは、成り行きから、マックスとベラの家で行われる妹ハニーの誕生日パーティーにアナを連れていくことになったが、当然のことながら、友人たちや妹をびっくりさせてしまう。ある者は自然に振舞おうと一生懸命に試み、ある者はアナに熱狂的に話しかけ、またある者は不覚にもアナを知っているながら認識できなかった。それでもサンルームのダイナーのテーブルでは、彼らとアナはなんとか互いに打ち解けあえるようになる。



図7 タブロイド紙をみながら階段を上るスパイク



図5 ウィリアムを家の台所と潜水服を着たスパイク



図8 アナにトイレの場所を教えるウィリアム



図6 潜水服を着たスパイクと階段ですれ違う



図9 アナを寝室に案内するウィリアム



図10 眼鏡を捜しまわるウィリアム



図11 約束に遅れそうになって急ぐウィリアム

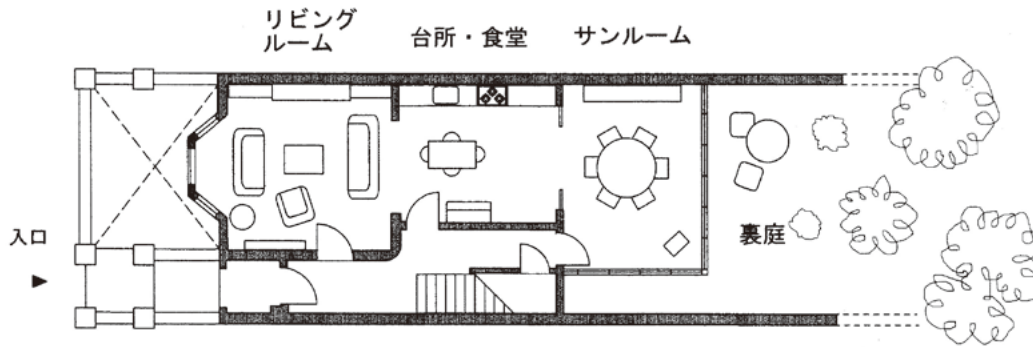


図12 マックスとベラの家、平面図



図13 マックスとベラを家のリビングルーム



図14 マックスとベラを家のサンルームで誕生日パーティー



図15 ウィリアムを家の食堂

この家は、ウィリアムを家の近くの高級住宅街にあるテラスハウスである。高級とはいへテラスハウスなので、道路に面して一部屋（プラス廊下）の幅の間口しかない。しかし、改装に改装を重ねた、変則的な間取りのウィリアムを家と比べて、住宅としての標準的な平面構成をもっている（図12）。

入口の廊下からすぐの部屋はリビングルームである（図13）。道路に面した出窓やマントルピース（暖炉を囲む枠）があり、シックなソファがおかれている。パーラー（parlor）あるいはシットイングルーム（sitting room）とも呼ばれる

この空間は、イギリスのテラスハウスでは本来、高級家具や美術品を置いた格調高い客間であり、かつては「表側」すなわち「フロント」の部分として、キッチンのある「裏側」すなわち「バック」のくつろいだ家族用空間の部分と、鋭い対比をなしていた。しかし、ここでは、近年の機能性を重視する傾向からか、あるいはベラが車椅子のせい、二つの部屋はオープンにつながられている。また、キッチンのさらに奥には、裏庭に面した大きなガラス張りのサンルーム(conservatory)が設けられている(図14)。

裏庭(backyard)はテラスハウスの重要な要素であり、樹木や芝生が植えられ、テーブルやベンチをおいたり、ガーデニングを楽しむ場所である。サンルームには広いガラス窓をめぐらして、庭の景観が楽しめるようにし、裏庭との往き来には、たいていフレンチドアというガラス張りのドアが用いられる。ウィリアムの家のダイニングキッチンも広いガラス面とフレンチドアによって裏庭に接している(図5.15)。裏庭は両隣の家の裏庭、さらに反対側の家々の裏庭ともつながっている。これらの裏庭は多くの場合、低い塀や単純な金網によってのみ仕切られているため、数軒、ときには数十軒の裏庭が一体にまとまり、それぞれの家の木々が集まって林のようになっていることもある。マックスとベラのサンルームから見える裏庭は非常に広々としていて、はるか向こうに向かいの家の裏側も垣間見える(図16)。

また、この家のサンルームには素晴らしいカップボードがある(図14)。カップボード(cupboard)というと、現在は閉じた食器棚を指すことが多いが、イギリスでは14世紀頃から、壁に棚を2-3段設けて、銀の皿などの高級食器を飾るものとして造られた。リビングのマントルピースと並んで、インテリアに魅力を添え、空間の焦点ともなっている。

マックスの家の狭い廊下で別れのあいさつを交わした後(図17)、外に出た2人は通り沿いに歩きだす。2人は歩くにつれて、マックスの家とまったく同じ造りのテラスハウスの家を一一つ通り過ぎていく(図18)。このシーンも、ウィリアムの家での階段の上り下りと同様に、ある種のリズムを感じさせる。

6. 共同庭園

次に、テラスハウスに付随する屋外空間についてみる。ウィリアムの家では、アナが裏庭に出ることはない。この裏庭は劇中には出てこないが、その理由は男二人の所帯なので手入れがされていないのかもしれないし、裏庭の見通しがいいために、アナの存在が発覚するのを恐れたのかもしれない。その代り、ウィリアムとアナはロンドン市内が見渡せる屋上のテラスで台本の読み合わ



図16 マックスとベラの家のサンルームでケザイアと食事



図17 マックスとベラの家の廊下、アナとウィリアムを見送った後に歓声を上げる友人たち



図18 マックスとベラの家を出たアナとウィリアム



図19 ウィリアムの家の屋上テラス

せをして過ごす。テラスハウス各戸・各階の暖房用の煙突があちこちの屋上にのぞいている(図19)。

また、マックスとベラの家での誕生日パーティーから帰る途中で、2人は近くの共同庭園(communal garden)に無断で侵入する(図20)。共同庭園は高級住宅地にあり、鉄柵か高い塀で囲まれている。周辺に住む住民がめいめい入口の鍵を持ち、よそ者は入ることができない。これもイギリス独特のものであろう。内部はかなり広く、子供が走り回れる芝生や樹木、ベンチがある。誰もいない夜の共同庭園で2人は抱擁をかわす。

ロンドンのテラスハウスにおいて、各住戸の裏庭が一体化されている様子は、航空写真でも明確に見ることができる。たとえば、マックスとベラの家のあるランズダウンロード周辺(図21)と、フランスのパリ16区の高級住宅街の航空写真(図22)を比較してみると興味深い。ロンドンでは、ずらりと並ぶテラスハウスが、内側に広大な中庭(裏庭の集合体)を囲んでいるのがわかる。パリではロンドンに比べ、住宅の庭は組織的にまとまらず、面積も小さい。基本的に「フラット」が主流のパリでは、当然各住戸に専用の庭はない。むしろ住宅の外側にある街路樹の多さが目立つ。イギリスのテラスハウスの住人はこのように裏庭を一体化した緑地を借景とした、外部から干渉されない静かな戸外空間を享受するのである。

7.まとめ

この映画はウィリアムとアナが結ばれるハッピーエンドになるが、映画の途中では、アナが一方向的にウィリアムから去ってしまう危機的事態が二回起きる。カーティスは、2006年に出版された台本集‘Six weddings and two funerals’の中で、アナが去っている間に「わき筋」を盛り込まなかったことが、この脚本の弱点であったと述べている。確かにそうかもしれないが、アナの不在期間を埋めているシーンはなかなか印象的である。

最初にアナが去ってから次にウィリアムがアナに会うまでの時間を埋めているのは、マックスとベラが、傷心のウィリアムを励ますために、自宅に次々と三人の女性を招いて彼に紹介する三つの短いシーンである。これらのシーンでは、マックスとベラの家内部がそれぞれカメラ位置を変えて撮影されている。中でも、「フルーリアン」のケザイアと食事をするシーンは、夕方のサンルームの窓越しに見える裏庭の緑が非常に美しく、解放感があり、優雅な雰囲気を醸し出している(図16)。ウィリアムはケザイアに礼儀正しく接しているが、心の中では、かつてこの場所でアナとともに過ごした楽しいディナーのことを思い出さずにはいられない。

また、二回目にアナが去ってしまった後は、ウィリアムが物思いに



図20 共同庭園に侵入するアナとウィリアム



図21 ノッティンギルヒルの空中写真(Yahoo! Map)
マックスとベラの家は写真のほぼ中心にある



図22 パリ16区パシーの空中写真(Yahoo! Map)
図21と同一縮尺

ふけりながらポートベロー通りを歩いていき、季節が春、夏、秋、冬と移り変わっていく長回しのシーンが入る。色彩に富んだ街の風景がとても印象的である(図23,24)。いずれにせよ、我々はこれらのシーンによっても、テラスハウスとその周囲の環境の魅力に引っ引き込まれていく。

この映画は、結婚してお腹が大きくなったアナが共同庭園のベンチでウィリアムと共にのんびり過ごしているシーンで幕を閉じる(図25)。このシーンから、彼らがマックスとベラの家と同程度のクラスのテラスハウスに新居を構えたことが推測される。

このようにして、もともと眠れぬ夜にカーティスが思いついた「おとぎ話」は、ノッティングヒルという舞台設定、脇役のキャラクターの魅力、そしてテラスハウスの生活を丹念に撮ることによってしっかりと肉付けされ、その結果、決して単純に荒唐無稽として片づけられない、愛すべき作品となった。我々は、ウィリアムと共にイギリスで暮らしていくことを決心したアナの選択に納得し、共同庭園のベンチの2人を祝福したい気持ちになる。



図25 共同庭園でくつろぐアナとウィリアム



図23 ポートベロー通りを歩くウィリアム①



図24 ポートベロー通りを歩くウィリアム②